

思考が必要であると推測される。そこで、宗教の成立する処を現象学的に分析してみる。

私は他者に媒介されることによって存在する。他者とは、私以外の人間、動物、自然である。私と他者とは相互に依存している。私は動物に依存しているが、動物は私に依存していない。それでも動物は人間を気遣っている。私は自然に依存しているが、自然は私に依存せず、しかも人間に無関心である。これらの存在の関係を根底的に支えているのが、背後に回り込むことの出来ない超越的關係性である。それ故、この超越的場が宗教の源泉である。具体的には、これらの存在者を統べている生命そのもの、それも実体化した意味ではなく、生命活動そのもの、生きていると言う働きそのものである。すべての存在する者は、この生きていると言う働きそのものの具象化なのではないだろうか。そして、生きていると言う働きそのものに、最も近く具象化されたものが神々であり、次に自然と動物達であり、人間が最も遠い存在なのかもしれない。従って、人間の自由は自己の欲求を無限に拡大し実現することの為にあるのではなく、生命活動そのものと自然や生き物たちの調和に参与する為にあるのではないだろうか。

宗教や信仰が生じてくる処は、生命活動そのものである。それ故、生命倫理学の諸問題の解決は、以上の意味で宗教的であればならないのは必定である。斯くして、始めに立てられた問いに、今や解答することが出来る。宗教的生命倫理学は可能である。否、それ以上に、生命倫理学は宗教的であるべきなのである。

日本の大学における

「生と死の教育」の可能性

沖 永 隆 子

本発表では、「生命（いのち）の価値」に視点を向ける「生と死の教育」（死生観を問う教育）の展望を述べる。いのちとは何かを問うこと自体が宗教（学）の本質であると考え、宗教学の体系に生死の問題をあてはめるのではなく、生死という事柄そのものを主題的に考察する立場から、「生とは何か？」「死とは何か？」という問いを、近年混迷を深める先端医療技術（生命操作）の倫理的課題に焦点をあてて今一度考えてみたい。

ホアン・マシアは「倫理における二つの問い」を、①「何をなすべきか」という当面の課題と、②「何のために生きるか」という生き方の根本問題への問いかけとしている。これまでのバイオエシックス的アプローチでは、日夜進歩しつづける医学と医療技術を後追いする形でそれらの是非や臨床利用に求められるガイドラインや指針をめぐり、人間とその生命に対する思想や哲学が根本的に再考される緊急課題に視点が向けられてきた。バイオエシックス教育の主たる課題は、そうした①「何をなすべきか」という判断基準・倫理原則を暫定的に導き出すよう努めることではあるが、各人の生き方の根本問題である②「何のために生きるのか」という抽象的で結果の見えにくい自らの死生観を問う課題に対しては後回しにされがちである。そ

第16部会

こで、先端医療技術（生命操作）、例えば脳死判定や脳死臓器移植の問題に対して、各々の文化における死生観に関する本質的な議論である自らの生と死をどのように捉えるのかについて検討する。周知のように、我が国で二〇〇九年七月十三日に「脳死は人の死」という臓器移植法案が可決された。この法律によつてドナー（臓器提供者）の生きる権利やいのちの尊厳が奪われ、脳死を人の死としない考え方を抹殺する方向へと突き進んでいった。「脳死は人の死」であるとは科学的に立証できていないこと、厳密な脳死判定後にも長期脳死の実例があることなどそれらの最も重要な事実が無視され、脳死臓器移植に急ぐ改悪案が成立したのだった。ドナーとレシピエント（臓器受容者）の「生きる権利」の狭間の中で、いのちが隠蔽されている。生と死の教育・いのち教育の現場で教材として活用されている『隠された風景―死の現場を歩く』（福岡賢正）を手がかりに、「いのちとは何か？」を考えたい。著者は、人間の勝手な都合で不要となったペット（犬、猫）を処分している現場（動物管理センター）と肉をつくるために家畜を処理している屠殺場など社会から隔離された「死の現場」でのルポ（取材）を通じて、生きることの本当の意味を世に伝える。「現代という時代は『死』が隠蔽され、いのちがとも見えにくくなっている時代です。それは生きていくという実感が乏しいということでもあります。だからこそこの社会は今、事実をきちんと伝えて、まっとうなことを主張してくれることを待っています」（二二〇頁）「人が生きるために他者の生き物のいのちをもらうことは『殺す』ことではありません。自分の中で『生かす』こ

とです」（二二七頁）。「死の現場」である動物管理センターや屠殺場、（脳死）移植医療の現場に共通してみられるのは、「いのち」の隠蔽である。現代社会は犠牲となった動物たち（現場に関わる人々）とドナーたち（その家族たち）の心の痛み（悲しみ・苦しみ）が徹底して見えてこない社会を生み出した。バイオエシックス教育の課題は、あるべき技術に対しての「是非を問う」のでも、「価値中立」に向かうよう仕向けることではない。失われてしまった（奪われようとしている）いのちとは何かを想像する力を、各自身に問いかけることが必要である。「生と死の教育」とは、あらゆる者が当事者であるという立場に立ち、「いかに生きるか、いかに死んでいくのか」を問い続けるプロセスの中で、互いにいのちの価値や人生の価値を見つめ直す共同作業である。

中有縁起と現代的いのち

金 永 晃

仏教において生命論は、十二支縁起（業感縁起）による輪廻の前世として時間的流れを説明する。特に四有思想は、一切の生死を相續するところに四有過程を辿るという。

四有とは、「生有・本有・中有・死有」として生死循環の一期を四つに分けて説明する。本有は出生から死まで一生を意味し、死有は業力によつて生まれた身体が無常のため寿命が尽き